
完全犯罪

風唄 沙耶

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

完全犯罪

【Nコード】

N7456U

【作者名】

風唄 沙耶

【あらすじ】

完璧な高校生の緋月響が、完全犯罪に挑戦する話です。サスペンス調になるように、頑張ります。

完全犯罪

十七世紀イギリス 犯罪史。

背表紙にそう書かれた本を、長い指が本棚から抜き出す。パラパラとめくり、何ページか目を通したあと、その青年は貸し出しの図書カウンターに歩を進めた。

黒のタートルネックとコントラストになる金茶がかつた髪が、照明を受けて光っている。世間一般で言う整った顔立ちは、本を読んでいる女性が顔を上げ、何秒か眺める程度に一目を引いた。

「貸し出し、お願いします」

図書カードを重ねて司書の女性に本を差し出してから、レストルームのドアのガラスから、中の様子を見る。そんなに人は多くない。暖かな春の日差しが窓から差し込んでいる。

今日は何時頃帰ろう。最近日は日が沈むのが遅くなってきたけれども、テストも近いから早めに帰ろうか。

「終わりました。返済期限は二週間後になります」

「どうも」

口角を少し上げて微笑する。本を受け取ってから、彼はレストルームへと向かった。

彼の名前は緋月 響。公立高校に通う三年生だ。このあたりでは飛び抜けて頭のいい黒羽高校に、彼は推薦入学、しかもA特待生で入学した。

容姿端麗、眉目秀麗、頭脳明晰、品行方正、と。彼を形容する四字熟語は、絵に描いたような『優等生』といったものばかりだ。所属している科学部の部員としてもいくつかの実績を持ち、部室にも何枚かの賞状が貼られていて、国立大学合格確実と誰もが言うほどの学力の持ち主でもある。

レストルームの椅子に座り無造作に脚を組む様が、実に絵になっている。頭よし、顔よし。『天は二物を与えず』という言葉は嘘で

あると、自ら証明している。

しかし彼は退屈だった。

つまらなかつたのだ。今の現状が。

授業に出ても、教壇の教師が口にするのは、とっくに理解していることと、つまらないジョークだけ。部活に行っても、高校の設備でできる実験なんて限られている。

友人付き合いも面倒だ。女だとか、誰と誰が寝ただとか。そんなくだらないことに時間を費やす、馬鹿な奴らがゴロゴロいる。

唯一楽しいのは読書のときくらいだろう。知識を詰め込むのは、楽しい。それも普通の高校生が読まないような、犯罪史にとっても興味がある。

犯罪者の考えていること。何を考え、彼らはどうやって犯罪を実行するのか。どうして彼らは捕まるのか。それらを読むたび、響は思う。僕ならもっと上手にやれるのに、と。

こんな誘導尋問に引っかかるほうが馬鹿だ。証拠を残さないようにするには、こうすればいい。IQ180をゆうに超える頭脳は、犯罪者たちの失敗の原因をすぐに予測し、解決策をはじき出すことができる。

「つまらないな……」

小さく口から出た声に、ハツとして顔を上げる。大丈夫、誰も気付いてない。みんな自分の本に夢中なのか、それとも思った以上に自分の声が小さかつたのか……まあ、どちらでも構わないが。

響は、ボタンと本を閉じた。どうして犯罪者たちはこんなにも馬鹿なのだろう。犯罪を犯すとなれば、冷静な思考を働かせることができないのだろうか。

これが自分なら、と。響は心から思う。自分なら、もっとうまくやる。見つからず、捕まらない自信もある。

日に日に強くなるその思いを、否定する気はない。ただ、一人でできないという現実だけが、響をかるうじて抑えつけていた。

絶対に裏切らない共犯者こそ、完全犯罪に不可欠なものだ。と、

響はいつも考えている。そんな理想的な共犯者が手に入れば、自分はためらわずに人を殺めるのだろう。

そこまで考えたところで、ジーンズ越しに感じるバイブレーションの感覚。ポケットに入れておいた、シルバーグレーの携帯電話を取り出して、ディスプレイを見る。受信したメールを開くと、妹からだった。

『何時頃帰る？』。年頃の女の子らしく、キラキラとデコレーションされたメールに、メールにデコレーションなどしたこともない年頃の自分は短く返す。

『今から帰るよ』

携帯電話をしまって外を見ると、水色とオレンジの空が広がっていた。

永遠に続くのだろうか。この退屈な日常は。

頭の片隅で浮かんだ、ある種恐ろしい考えを追い払うように、響は小さくかぶりを振った。

家族（前書き）

第2話です。よろしくお願いします。

家族

「ただいま」

「おかえり！ 今日の晩ご飯はシチューだった」

「そっか。お前、シチュー大好きだもんな」

「お兄ちゃんだって好きでしょー？」

腕にぶら下がってくる妹 琴美といって、中学三年生だ に、

「重い」と言っただけならば、ムツとしたように唇をとがらせる。「そ

れが、中学生の女の子に言う言葉？」

「何が『中学生の女の子』だよ。そろそろ試験だろ。『中学生の女

の子』は、試験勉強しなくてもいいのか？」

「うるさいなあ。あたしはお兄ちゃんと違って秀才じゃないの！」

「だったら、なおさらだろ。数学なら教えてやるよ」

「ほんと？ なら、ちよつと待ってて！」

「あんまり簡単な持ってくるなよ」

階段を走って上がる背中にも声をかけたが、実際そんなに簡単な問

題ではないだろう。なんだかんだ言っても、琴美は試験では毎回、

一桁の順位を持って帰ってくる。

自分も自室に上がり、机に本だけ置いて、再び下に降りる。

「おかえりなさい」

「ああ、母さん。ただいま」

「今日はどこに行ったの？ デート？」

「そうならいいんだけどね」

「勉強の虫のお兄ちゃんが、デートなんか行くはずないじゃん。お

兄ちゃんの恋人は、数学の参考書でしょ」

「おい、琴美」

「ね、ここ教えて！」

琴美が響にシャーペンを手渡す。見せられたのは、確かに若干ハイレベルの応用問題。「図形か」

「苦手なんだもん、平面図形……」

「こつこついう図形は、ここに補助線引いてやればいいんだよ」

「え、どうして？」

こつ引いてやったら、この線分と平行になるだろ。そう言うだけですぐに理解するあたり、琴美もやはり頭がいいのだろう。自分で数字を書き込み、琴美は響を見た。「どう？」

「合ってるよ」

「ほんと？ やった」

「母さん。今日はシチューだって？」

「そうよー。寒くなってきたし、琴美がどうしてもって言うんだもの」

「やっぱりか」

「あー！ お母さん、言わないでよー！」

不満げに声を上げる琴美をよそに、響は問題集をテーブルの隅によける。それを見てから、専業主婦の母、和子がシチューをテーブルに運んできた。

「はい、熱いわよ」

「ありがとう」

「おいしそう！ ね、おかわりある？」

「全部食べてから言いなさい」

和子が笑いながら言う。「はあーい……」と、おどけたように言う琴美に、響はクスクスと笑った。

「あー、また明日から学校かあ」

「テストはいつからなの？」

「明後日から、二日間。初日に数学と英語だよ。もう最悪！」

「どっちとも、勉強すれば点数取れる教科だよ。高校に入ったら、数学がいくつにも分かれるんだからな」

「ええー！ やだ、困る！」

今にも泣きそうな琴美に、和子が声を上げて笑う。

あまりにも普通の いや、ひよっとしたら普通以上に 幸せ

な理想的な家庭の中で、何故自分だけがこうなったのだろうか。

犯罪を犯したくてうずうずしている。自分の頭脳がどこまで通用したいか、試したくて仕方がない。

悲劇の主人公を気取るつもりは、さらさらないが、それでも疑問に思う。琴美も母さんも、こんなに普通の人なのに。

「母さん、父さんは？」

「今日は早いみたいよ。さっき連絡があつたの」

響たちの父親は大学教授だ。忙しく働いているため、早く家に帰ることはほとんどない。「あ、帰ってきたみたいね」

玄関から聞こえたガチャガチャという音に、和子が反応する。

「父さん、おかえり」

「ああ、ただいま。今日はシチューか」

「琴美の熱烈なリクエストらしいよ」

「もう、お兄ちゃん！」

「本当に琴美はシチューが好きだな」

と笑いながら、父 雄三も椅子に座る。「響、もうすぐ模試じゃないか？」

「そうだよ。一週間後」

「ちゃんと勉強しているか？」

「してるさ。それよりも、その前に琴美が明日から試験期間だ。中学の数学は、まだ簡単だからな」

「お兄ちゃんは頭いいもん。あー、出来過ぎた兄を持つ妹って不幸だなー」

「お前だって、いつも順位は一桁だろ」

「中学三年間、全部トップのお兄ちゃんに言われても、全然嬉しくないですー」

「琴美、そんなこと言わないの」

「中学内容は早めに終わらせて、高校の勉強したほうがいいぞ。高校の準備してなかった奴らが、赤点取ってるんだからな」

「はいはい、心がけます」

その返事を聞いてから、響は手を合わせ、立ち上がった。「ごちそうさま」

「響、おかわりは？」

「いや、今日はいいいよ。おかわりなんてしたら、琴美に殺されそうだ」

「お兄ちゃん！」

頬を膨らませ、琴美が不満げに声を上げる。「母さん、コーヒー淹れてくれないか。今日は朝まで勉強するから」

「うわあ、お兄ちゃんったら、がり勉」

「嫌な言い方するなよ。お前だって三年後は大学受験だ」

「あたしはその前に高校受験が来るもん。推薦で黒羽高の特待取ったお兄ちゃんには負けるけど、そこそこのところに行ってみせるもん」

「二人とも、その辺にして。はい、響、コーヒー」

「ありがとう、母さん」

白い湯気が立ち上る、黒いコーヒー。ブラックを好むようになったのは、いつからだろうか。父親の影響か、小学生くらいのときからコーヒーは飲んでいた。

そうだ、確か中学三年生頃からじゃなかっただろうか。受験勉強に備えて、コーヒーをブラックに変えた気がする。と言っても、受験勉強らしい受験勉強など、していなかったが。「じゃあ、少し早いけど部屋に帰るよ」

「先にお風呂に入っってね。湧いたら呼ぶから」

「ああ、わかった」

コーヒーを一口だけ飲んで、自室に上がる。本棚にズラッと並んだ参考書や学術書、あとは趣味の犯罪史の本など。隙間一つ無く几帳面に並べられているのは、読書好きの所為か、それとも完璧主義者故か。

何度も読み返した本には目もくれず、椅子に座りながら図書館で借りてきた本を開く。模試の勉強は、これを読み終わってからにしよう。

「……………」

完全犯罪。

何度も何度も、実行してみたいと願った、たった四文字の言葉。

絶対に裏切らない同士が欲しい。自分と同等か、もしくはそれ以上で頭がよく、冷静な同士が。

しかし結局それが簡単に手に入らないのがわかっているからこそ、あきらめてしまう。本当に、同士さえ手に入ればいいのに。

そうぼんやりと考えながら本を閉じたとき、母親が響を呼んだ。

A 特待生（前書き）

第3話です。よろしくお願いします。

A 特待生

翌日。琴美がバタバタと準備を始める頃、響は家を出る。朝課外があるからというのもあるし、ラッシュに巻き込まれるのが嫌だからだ。

くだらない人間たちの、くだらない話。そんなものを朝から聞くくらいなら、睡眠時間を三十分削ったほうがはるかにマシだ。

運良く座ることのできたバスの中で、周りに知り合いがいないのを確認してから、鞆の中の本を開く。別に見られても構わないのだが、犯罪史の本を読んでいるところを見られてもしたら、後々付き合いに支障が生じるのだ。

人の変わったところに、あまりにも過敏に反応する。こういった点、学生は実に面倒だと思う。

何ページかの後書きは全てすっ飛ばし、鞆の中に本をしまう。代わりに携帯電話を取り出し、ディスプレイを見る。ツイてない。学校に着くまで、あと五分ある。

単語帳でもめくっていいようかとも考えたが、あいにく授業内容は全て頭に入っている。というよりは、二年生のときにすでに自主的に終わらせてしまった。仕方がないので、携帯電話でインターネットのニュースを見ることにした。

窓からの景色が、学校近くのそれに変わった頃、響は携帯電話を閉じた。サイレントマナーモードになっているのを確認し、鞆の内ポケットに押し込み、バスを降りる。

「おはよう、緋月くん」

「ああ、おはよう」

教室で騒ぐクラスメイトたちにつこりと笑い、挨拶を返す。全自動で出てくる笑顔は、いたって平和で理想的な学校生活を自分に提供してくれている。

さわやかで優しい、優等生。何年と被り続けてきたその仮面は、

おそらくもう外れないのだろう。……まあ、外すつもりもないのだが。

黒羽高校は、成績ごとにクラスが分けられている。上から、難関クラス、特進クラス、準特進クラスで、年に一度だけクラス替えのテストがある。

響は当然難関クラスだ。その中でも、彼は飛び抜けて頭がいい。

「緋月くん、この間の生徒会で出た議案なんだけど。みんなにしてみらったアンケートの結果が出たから、渡しとくね」

「ああ。わざわざありがとう」

「うん、気にしないで。生徒会長さんも、大変だね」

生徒会の生徒会長。優等生を演じるためだけに、築いた絶対的な信頼で手に入れたポジション。優位なポジションは持つておいたほうがいいというのが、響の持論だ。

アンケート結果を渡しに来た、副会長である三原綾子みはいらいに、口元だけの微笑で返しながら、アンケート用紙に目を通す。フリだけする。

興味ない。結果の予想はできていたし、アンケートをしようと言い出したのは三原だ。「書いてない人がいるのは、このクラスだけなの。なんか、少し恥ずかしかったよ」

「誰が書いてないんだ？」

「書いてないって言うよりも、学校に来てないの」

「霧崎か」

響と同じ難関クラスの霧崎竜きりさきりゅう。授業はおろか入学式も来てないという、前代未聞の生徒だ。

いや、それだけなら前代未聞でもないのだろうが、竜は響と同じく推薦で、しかも同点でトップ入学したA特待生ということだ。担任の教師が、「内緒だぞ」と言って、教えてくれた。「どうして霧崎くん、学校に来ないんだろっ」

「さあね。誰かあいつと同じ中学のやつ、いないのか？」

「うん。それ以前に、顔を見た人もいないらしいの」

「どんなやつなんだよ……」

小さく息をつき、「アンケート、ありがとう」と、もう一度言う。
「今日、英文法のテストだね」

いつまで話す気だ。うんざりした思いは露ほども表には出さず、
人当たりのよい笑顔は崩さない。「緋月くん、勉強した？」

「まあ、それなりにね」

していない。何もしていない。と言うより、テストがあったこと
も忘れかけていた。

「それなりに、かあ。緋月くんって、本当に頭いいよね。うらやま
しいなあ」

「はは、そうかな」

「だって、黒羽高のA特待生なんて、めったにないって、先生が言
ってたもん。しかも推薦入学。この学年で、A特待生って二人しか
いないんだって」

「へえ」

「もう一人は誰なんだろう……緋月くん、知ってる？」

「いや、知らないよ。A特待生だからって、言いふらすことでもな
いしな」

「そうだよな。……うーん、気になるなあ」

自分は別に気にならない。知っているのだから、当たり前だが。

そろそろ三原も図々しいと思ったのだろう。じゃあね、と一言言
い残してから、パタパタと自分の席に帰っていった。もう、あと五
分ほどで朝課外が始まる。

三原との会話で出てきた名前 霧崎竜。

見てみたい。黒羽高A特待生は、自分で言うのもなんだが、確か
にもものすごい。A特待生になれるくらい頭がいいのなら、普通だっ
たら早い話、学校はそれなりに楽しいはずなのだが。

自分と同等の頭脳を持っていながら、学校に来ない理由を、ぜひ
とも聞いてみたいと思った。

対面（前書き）

第4話です。よろしくお願いします。

対面

「返却、お願いします」

学校帰りに寄った図書館で、昨日の本を返却する。何度か顔を見たことのある司書が、微笑みながら本を受け取る。

カウンターに来るまで、館内をザッと見て回ったが、見知った顔はいなかった。まあ、この時期は三年生にとって最後の大会を控えている部活も多いのだろう。

今日は教師たちの会議があるらしく、学校は早く終わった。まだ四時にもなっていないせいだろう、ほとんど人がいない。

いつもの棚の前に立ち、下の方の段から順に、読んでいない本を探していく。上の方の段は、すでに読み終えた。へえ、『完全犯罪』なんて本がある。

今の僕にはお似合いだな、なんて思いつつ、どことなく古めかしいデザインの表紙に手を伸ばす。「あ

「あ？」

響の視界に、伸ばした指先に触れた、別の指先が映った。……

あんな、借りるのか」

「そのつもりだけど。譲っても構わないよ」

「あんなが借りる」

「ああ、ありがとう」

ぎこちなさを、感じた。互いが口に行っているのは、おそらく互いにとって自然な言葉だ。それなのに、ぎこちなさ。誰とでも自然に話せる自信があったため、少し戸惑った。単純な人間が見たら、怒っているとも取れる表情の彼に、響は問いかけた。「君、学校は？」

「行ってない」

「どうしてだ？ 君は、高校生くらいに見えるけど」

「……あんな、初対面の奴にそんなことまで聞くのか」

ずいぶんそっけない、棘のある言い方だ。笑みを浮かべた表情は

変えずに、響は当たり前障りのない返答を返す。

「あまり聞かれたくないなら、聞かないよ。ただ、犯罪史に興味のある高校生なんて、珍しいと思って」

「それは、あんたにも言えるんじゃないか」

「はは、僕はちよつとした気まぐれだよ」

「嘘だな。それなら、どうして下の段から本を探したんだ」

「……どういう意味かな」

笑顔のまま聞き返す響に、彼は本を取って無造作に渡した（押し付けたとも言つ）。その動きに伴って、後ろで結ばれた長く黒い髪が揺れる。彼は、ろくに表情も変えずに続けた。「単なる気まぐれなら、普通は上の段の方から順に見ていくはずだ。それなのにあんたは、下から順に見ていった。」

大方、この棚の本はほとんど読み終えたつてところだろ」

「それだけかい？　じゃあ、僕は普通じゃないってことになるのかな」

「制服からして、あんたは黒羽高だ。黒羽高校の鞆は、結構傷が付きやすい。それなのに、あんたの鞆はほとんど傷が付いてない。背丈と体格、もつと手っ取り早く言えば、名札が三年生つてのを示してる。このことから、『まだ新しいから傷が付いていない』という可能性も、消える。」

このことから考えられるあんたの性格は、物を大切にする几帳面」

正解。

「君、賢いな。どこの学校？」

「……黒羽高」

「黒羽高？」

その口から出た言葉を、思わず繰り返した。今朝交わした三原との会話が、脳裏に鮮明に蘇る。

学校に来ない。

黒羽高校推薦トップ入学、A特待生。

そして、この観察力と推理力。

「……霧崎、竜？」

まさか、まさかそんな。

自分の目の前にいる、不良にも見えるこの男が、黒羽高校トップ入学のA特待生？「お前か？ 霧崎竜って」

「ああ」

低い声で告げられた肯定の言葉に、響は内心驚きを隠せない。「君が そうか」

「なんで知ってるんだ」

「なんとなく、かまをかけてみただけさ。僕は緋月響。君と同じ黒羽高校のA特待だ」

「担任から名前だけは聞いたことがある。相当の優等生だってな。

……あんたがそうか」

「ああ。 よろしく、霧崎」

いつもの微笑を顔に貼り付け、右手を差し出す。

しかし霧崎は応えなかった。首を傾げる響にだけ聞こえる程度の、けれどはつきりとした声で、霧崎が言う。「俺に、嘘の笑いは通用しねえよ」

響の笑みが凍りついた。

「目が笑ってねえ」

「……………」

まるで黒豹のような鋭い目が、まっすぐに自分を射抜いている。

足元まである黒いコートから覗く、黒いワイシャツに黒いスラックス。さらに黒い靴と、全身黒づくめなため、本当に黒豹のようだ。

響はゾクリとした。……おもしろい。

口元の笑みは消さず、目を静かに閉じ、そして開く。「気が付いたのは、お前が初めてだよ」

ゆっくりと開かれた、ちょうどよい位置にはめ込まれた瞳は、誰もが一瞬怯むほどの強い光を放っていた。浮かんでいるのは、さっ

きまでの柔らかな笑顔ではない。獣のような表情　いや、まさに獣だ。

クラスメートも教師も、父さんも母さんも琴美も気付かなかった、嘘の笑顔。それに気付いた奴がいた。しかも初対面で。「それが本当の笑いだな。優等生なお坊ちゃまの顔はどこに消えたんだ？」

唇をゆがめ、霧崎が声を上げずに笑う。初めての霧崎の笑いに、響はさらに目に力を込める。「あいにく僕は、優等生でもお坊ちゃまでもないんだ」

「……おっかないな」

「お互い様だろ。お前の目つきだって、相当鋭いぞ」

「あんたほどじゃねえだろ」

「それに関しては、否定する気は起きないな」

自然と口元が緩む。見つけた、とうとう見つけた。「今から暇か？　暇だったら、家に来ないか？」

「何故だ」

「クラスメートだろ。友だちとして、誘ってるだけだよ」

響の後ろの棚の陰から、若い女性が歩いてくる。霧崎がフツと彼女に視線を移す。「どうかな？」

そして霧崎が視線を戻したときには、響はもういつもの優等生の微笑に戻っていた。

紅茶を飲みながら（前書き）

第5話です。よろしくお願いします。

紅茶を飲みながら

「おかえり、響。早かったのね」

「先生たちの会議だったさ。……あ、友だち連れてきたから、部屋に上がってもらおうよ」

制服姿の響とは対照的に、黒ずくめの、明らかに制服ではない服装の霧崎を、和子が不思議そうに見る。「響がお友だちを連れてくるなんて、珍しいわね」

「そうかな」

「なんだか、お友だち付き合いよりも、読書が好きみたいなんだから。安心したわ」

「紹介するよ。同じクラスの、霧崎っていうんだ」

「霧崎さんね。よろしく」

「初めまして」

小さく頭を下げる霧崎に和子は目を細め、「甘いもの、好きかしら。お昼にケーキ買ってきたの」

「……お構いなく」

「遠慮するなよ。母さん、頼むよ。僕のと二人分」

「はいはい。響は本当に甘いものが好きね」

楽しそうに笑いながら、和子が台所へ向かう。響は霧崎を部屋に案内し、電気をつけた。「甘いもんが好きなのかよ」

「……女々しいとでも言いたげだな。小さい頃から、母さんがよく買ったり作ったりしてたんだよ。琴美も好きだし」

「琴美？」

「妹さ」

適当に座れよ。響にそう言われ、霧崎はベッドの縁に腰を下ろした。

「……意外だな」

「何が意外なんだ？」

「あまりにも普通の家だった」

「また微妙な感想だな。どういう意味だ？」

「こんなに普通な家で、あんたみたいな人間が育ったのが不思議で仕方ねえ」

フツと響が口元をゆがめる。霧崎の目が鋭くなった。あの表情だ。さっきの、緋月の本当の表情。「緋月」

霧崎の声に、ドアのノック音がかぶった。学習椅子に座っていた響が、ドアを開けて盆を受け取る。「ありがとう、母さん」

「お紅茶でよかったですら？」

「霧崎、紅茶で大丈夫か？」

「ああ」

「よかったわ。ゆっくりして行ってね」

和子が微笑んでドアを閉めた。白いティーカップで、透き通った夕日色の紅茶が湯気を立てている。「へえ、アンティックのショートケーキだ」

「アンティック？……ああ、ケーキ屋の名前か」

「ご名答。結構高いんだ、ここのケーキ。値段に見合うだけの味ではあるけどね」

出された紅茶を一口飲み、響は口を開いた。「霧崎。お前が、むやみに人に言いふらさない人間と信じて、聞いてもいいかな」

「聞くのは自由だ。まあ、答えるのも俺の自由だけだな」

「十分だ」

と、にっこりと微笑んでから、「お前は、この世の中を壊したいと思ったことはないか？」

「……ずいぶんと危険な思想だな」

「僕は常に思っているんだ」

そう言ってから、響は紅茶を口に含む。霧崎は表情を変えずに響の話の話を聞いている。

「世の中を見ていると、実に中途半端だと感じる。周りも中途半端な人間ばかりであふれている。そのくせ、どこかが狂っているんだ、

この世界は。 中途半端に壊れているよりは、いつそ全て壊してしまつたほうが、よほどいいと思う」

「ふん、優等生サマの発言とは思えないな」

「言つたる？ 優等生なんかじゃないって」

「今のおんたを見てれば、よくわかるさ。今のおんたと外でのあんた、同一人物とは思えない」

「 霧崎は、僕に似ている」

真っ白い生クリームをスポンジケーキと共にフォークで刺して。

意味を知りたそうに見つめてくる霧崎からわざと視線を外し、響はケーキの上品な味を舌で堪能する。「もちろん、見目形じゃない。

内面的な部分さ」

「俺は、あんたほどの過激派じゃないつもりなんだけどな」

「お前みたいタイプが学校に来ていない理由を、僕なりに推察してみた」

クリームを紅茶で喉に流し込み、響はかチャリとティーカップを置いた。「僕と同等の頭脳を持っているなら、少なくとも勉強で苦労することはない」

「 訳すと、自分は勉強で苦労したことはない、か。相当の自信家だな。嫌な性格だ」

「頭がいいだけの普通の高校生なら、学校で高校生活を楽しむむだろうな。」

実際にお前みたいなのを見て、弱いという印象は受けなかった。人間関係についてのトラブルで不登校……というのも考えにくい。大体、そうならわざわざA特待なんて取らないだろうしな。余りにも目立つから」

「……で？」

「つまりお前みたいなやつが学校に来ていない理由は、学校の学習内容があまりにも簡単すぎて、授業がつまらないから。 どうだ？」

大分小さくなってしまったショートケーキを、響がさらに細かく

切る。霧崎はティーカップを持ったまま、小さく口を開いた。「あなたは」

「ここまでではあくまで、世間一般の『お前みたいなやつ』に対しての推論だ。だけど、『お前』の場合は違う」

フォークの先のケーキが、霧崎の鼻先に突きつけられる。ケーキの向こうに見える響の目は、油断なく光っている。

推察の対象が『お前みたいなのやつ』から、『お前』に変わった。それを聞いた霧崎の目も、自然と鋭くなる。

「お前は、人というものを見下している」「根拠は？」

「目さ。すべてを見下したような、その目」「響が指先で前髪をいじる。「服の好み、雰囲気、物腰、家柄……。

第一印象でわかることは、結構多いぞ」

「性格までわかるもんなのか」

「まあ、後半ははったりだけど、あまりにも僕に雰囲気似ていたからね。かまをかけてみたのさ」

「……………」

「霧崎」

あまりにもあっさりと騙され、むくれていた矢先に名前を呼ばれ、霧崎は思わずびくりとした。「壊してみないか」

「は？」

「壊してみないか？ このくだらない、半端な世界を」

皿の上でクリームにまみれて残っていたいちごを、響がフォークで刺した。「具体的にどうするんだ」

「わかって聞いてるのか、霧崎？ なら、単刀直入に言おう」「ヒョイト、響のいちごが口の中に放り込まれる。

「完全犯罪を犯してみないか……と、聞いているんだ」

クラッシュジャー（前書き）

第6話です。よろしくお願ひします。

クラッシュヤー

「完全犯罪」

「そうだ」

響の肯定に、さすがに霧崎もあっけに取られたようだ。しかし否定をしない様子を見て、霧崎もようやく響が本気ということを理解したようだった。

完全犯罪を犯したい。どこからどう考えても、通常の高校生の思考ではない。

一瞬、精神的におかしいのかとも考えたが、おそらく違っだろう。無論、無意識のうちに精神的な部分がおかしくなっているという可能性もなくはないが、そんな様子はちっとも見受けられない。「正気か？」

「正気じゃなかったら、こんなこと話さない」

響が射抜くように見つめてくる。何の気なしに見た手首には、鳥肌が立っていた。

しばらくの沈黙。十分か二十分か、それともそれ以上か。二人は静かににらみ合っていた。

「響、晩ご飯できたから、霧崎さんと降りてらっしゃい」

その沈黙を打ち破ったのは、和子のドア越しの声。それが合図にでもなったように、二人はフツと目の力を抜いた。

皿やティーカップを盆に乗せ、響が立ち上がる。と同時に、霧崎は堰を切ったように、喉の奥でクツクツと笑い出した。「霧崎？」

怪訝そうな顔をする響に、霧崎はゆっくりと口を開いた。「緋月、あんた、思った以上におもしろい奴だな」

「どういう意味だ？」

「で、意外なところに気が回らない」

口角を上げてベッドに座ったまま、霧崎は響の手をつかんで引き

寄せた。「答えは、『イエス』」

「え？」

「『完全犯罪を犯してみないか』に対する、俺の答えだ」

霧崎の言葉に響もようやく言葉の意味を理解したらしい。つかまされた手をねじるようにして振りほどき、やや強く霧崎の手を握った。

「誰を殺すんだ？」

と、霧崎が言った。

夕食後の部屋で、響が霧崎から聞き出したことは、ごくわずか。

霧崎は高校生なのに一人暮らしをしていることと、普段やることなく暇だから、図書館に入り浸っているということだけだ。

「高校を受けた金は、どこからひねり出したんだ？」とい響の問いには答えず、霧崎は夢中になって本をパラパラとめくっていた。仕方がないので、響もその隣で今日借りてきた本を読むことにした。完全犯罪を犯そうという二人が、そろって読書というのも、変な話である。

しばらくして響が後書きにさしかかったところに、霧崎が冒頭の口火を切った。「そうだな。僕の希望としては、殺されてもおかしくないような、社会のごみ。なおかつ、僕に関わりのない人間かな」

「ある程度関わりがあつたほうがいいんじゃないのか？ そうじゃなきゃ、完全犯罪に必要なデータなんて集まらない」

「やっぱりお前は賢いよ、霧崎」

「また試したのか？ 本気で嫌な性格してるな」

和子からの差し入れである、近所の和菓子屋のどら焼き。恐ろしいことに、今までどら焼きを食べたことのない霧崎は、ずいぶんとそれを気に入ったようだった。「俺にだって、あんたを観察して推察する権利くらいあるはずだ」

「なるほど？ 頭脳明晰で秀才の僕は、自分のプライドを満足させるため、完全犯罪を犯そうと考えた…… っていう推理なのかな？」
「自分で『頭脳明晰』と言える自信も、大したものだと思うが、まあ、そんなところだ」

霧崎の抱きかかえる茶色い袋から、どら焼きを一つつまみ出してから、響が答えた。「僕は黒羽高で生徒会長をしている」

「…… 本当に、絵に描いたような優等生サマだ」

「霧崎。お前は学校に来ていないから知らないだろうけど、少し前に生徒会で一騒動あったんだよ」

響がどら焼きに口を付ける。「黒羽高は、非常に多くのことを生徒に任せている。まあ、いわゆるお坊ちゃんやお嬢さんが通う学校だから、不正なんてめったにない。……と、教師たちは信じているからだ。実際は結構荒れてるけどね」

「荒れてる、つてのは？」

「生徒同士で寝てるカップルも、何組かいるってことさ」
「……………」

「ところが、生徒会の会計が合わないときがあった。ほんの何千円かだけだね。その時は、僕が適当に帳尻を合わせておいたんだけど、使い込みか？」

「ああ。 こう見えて、僕は機械にも詳しいんだ。僕のパソコンから、教師たちのノートパソコンのデータに、勝手に侵入させてもらった」

「結果は？」

「生活指導の、樋口 悟。彼が使い込みをしていた」

机の上のノートパソコンを開いて、霧崎にデータを見せた。様々な証拠が分かりやすくまとめられている。それらをチラリと見た霧崎は、吐き捨てるように言った。「…… とんだ生活指導だ」

「短い感想だな。もっと豊かな感情を持たなきゃ、本物の社会生活不適合者になるぞ」

「どうせ、もう社会生活不適合者だ」

「拗ねるなよ」

「拗ねてない」

霧崎の駄々っ子のような言動に、響がこっそりと笑みをこぼす。袋の中のどら焼きは、今にもなくなりそうだ。「そんなに食べると太るぞ」

「うるさい。……そいつは、いくらぐらい使い込んだんだ？」

「自分でデータ見るよ。まあ、何千万単位かな。建設費用を使い込んだら、そのくらいは余裕だ」

「何千万も、何に使うんだ？」

「樋口は、何の変哲もない、どこにでもいる普通の中年教師だ。何に使ったと思う？」

「……女か」

「はい、正解。僕も同じ結論に達した」

パソコンをシャットダウンし、響は霧崎の横に腰を下ろした。「女へのプレゼント。後はまあ、情事への料金かな」

「情事……」

響の言葉をそのままオウム返しにした霧崎を、不審に思って覗き込んだ。「霧崎？」

その直後、まん丸に見開かれる双眸。無理もないだろう、霧崎の顔が耳まで赤く染まっていたのだから。

「あんた、直球すぎねえか」

「情事って言葉がか？ …… 案外純情なんだな」

意外な霧崎の一面に、響は声を上げて笑った。「まあ、そんなわけ。まず樋口を殺して、本格的に世の中を壊してやるのも楽しいじゃないか」

「世の中を壊す人間……さしずめ、『クラッシャー』ってどこか」

「クラッシャー、ね。和訳して、破壊者か」

「狂った俺らにはぴったりだろ」

クラッシャー。響はもう一度小さく口に出し、満足げに口角を上げた。「さあ、そろそろ寝ようか。寝不足は美容の大敵だからね」

「美容なんか気にするのかよ。やっぱり女々しいやつだな」

「冗談だよ。今は笑うところだ」

見るからに不満げになる霧崎を尻目に、響は父親の部屋から持ってきた布団を床に敷く。大学教授である父親は、家に帰らずに、大学の近くのホテルに泊まるのがよくあるのだ。

「さあ、敷けたよ。お前はともかく、僕は明日も早いんだからな」

「なんだ。行くのか、学校」

「当たり前だろ。僕はこれでも優等生で通ってるんだ」

「さつきまで、自分は優等生じゃないとか言ってたのにな」

「それはそれ、これはこれさ」

と、涼しい顔をする響の手からどら焼きを引ったくり、霧崎は同じく涼しい顔でぱくついた。「おい……」

「なんだ？ 甘いもの取られて怒るなんて、本当に女みたいなやつだな」

したり顔で言い放つ霧崎に、響は枕を投げつけた。

殺してもいい人間（前書き）

第7話です。今回は少し短いですが、よろしくお願ひします。

殺してもいい人間

「あら、響。霧崎さんは？」

起きてきた響に、和子が不思議そうに首をかしげた。きつね色のトーストにマーガリンを薄く塗りながら、響が答える。「部屋で、まだ寝てるよ」

「そろそろ起きないと、遅れちゃうわよ。同じ学校でしょう？」

「いいんだよ。あいつは学校に行っていないんだから」

「まあ、本当」

「僕の部屋に入れといていいよ。あいつの目が覚める頃には、僕も帰ってくるからさ」

「ご飯は、食べないの？」

「枕元にポツキー置いといたよ」

笑いながら言う響の言葉を、和子は冗談だと受け取ったらしかった。しかし実際は冗談でも何でもなく、ポツキーは置いておいた。

食べるかどうかはわからなかったが。「母さん、琴美は？」

「まだ寝てるみたいね。昨日は夜遅くまで粘ったみたいよ」

「琴美の一夜漬けで乗り切る癖も、そろそろ何とかしたほうがいいかもね。高校では通用しないから」

「そうねえ」

コロコロと笑う和子に、響はただ笑みを返す。琴美が家にいる間に霧崎が起きてくる可能性はゼロだ。枕元のポツキーの箱に「部屋から出るな」と書いたメモを貼り付けておいたし、霧崎が部屋を出るメリットはどこにもない。「じゃあ、行ってくる。今日は午前中までだから、昼からは霧崎と買い物に行ってくるよ」

「はいはい。行ってらっしゃい」

琴美があくびをしながら起きてきた。「試験頑張れよ」と声をかけ、響はバス停に歩を進めた。

今日の自分は、ずいぶんと機嫌がいい。まるで他人事みたいな言

い方だが、事実そうなのだから、仕方がない。

ずっと、何年も前から待ち望んでいた共犯者。誰もが認める完全犯罪を、自分はいにし得る機会を得たのだ。

その日の授業は上の空だった。わざわざ聞かなくても、すでにかつているから、別に聞く必要はないのだ。……早く帰りたい。

そんな響の願いは、最後の四時間目の授業のときに吹っ飛んだ。四時間目の授業は保健体育。担当は、樋口だ。

太い身体を揺らしながら授業を進める様子は、見るからに面倒がつている。思わずため息が出そうになるのを、半ば必死で抑えた。口から出てくる言葉に、教科書の内容は数えるほどしかない。基本的に愚痴だ。こいつ、本当に殺していい人間だな。

樋口は、たいてい全ての授業が終わってから、すぐに学校を出ている。昨日の夜、いつもより早く終わる今日を利用して、樋口を尾行してみようという話になったのだ。

板書された文字の羅列を眺めながら、ぼんやりと今日の計画を練る。霧崎の風貌と服装は目立ちすぎるから、早めに帰って服を買いに行こう。樋口の目的地は、おそらくは歓楽街。近くに大きなデパートが立ち並んでいるので、いくつか店を回ってみるつもりだ。

「はい、じゃあそろそろ終わる。号令」

結局、一時間の授業でページも進んでいない。やる気があるのか、こいつは。

まあ今そんなことを言っても仕方がない。もうすぐ、お前は死ぬんだ。

運命（前書き）

第8話です。よろしくお願いします。

運命

部屋に上がると、霧崎はまだ寝ていた。冗談だろう。昨日霧崎が寝たのは、零時前だったはずだ。樋口を殺す計画を立てていたら、お互いいつの間にか寝てしまったのだ。

今は一時過ぎ。布団にくるまったまま寝息を立てている霧崎の下から、敷き布団を勢いよく引っ張る。ゴロゴロと転がる身体は、いきなりなくなった敷き布団に仰天して目を覚ました。「いつまで寝てるんだよ、人の部屋で」

「……緋月か」

「ただいま。ずっと寝てたのか？」

「うるさい。毎日十分な睡眠を取るのが、俺のルールなんだ」
「変なルール作るな」

寝ぼけまなこで目をこする霧崎の長い髪が、あちこち変な方向に跳ねている。響のパジャマを身につけたまま、また布団の中にくるまろうとする霧崎に、響はポッキーの箱を放った。

「寝るなよ。出かけるから」

「は？ どこにだ？」

いまいち頭が回っていないらしい霧崎は、目を閉じたままポッキーを食べ始める。二つ入っている袋の一つを取り上げてから、響は私服に着替えた。

「街だよ。お前の服装は目立ちすぎる」

「俺はこの服が好きなんだ」

「なんで今時、全身黒づくめなんだよ。性格はともかく顔はいいんだから、それなりの格好したら見られるようにはなるさ」

大きなため息をつき、食べながら着替えようとする霧崎の菓子袋を取り上げる。食べながら着替えなんてされたら、日が暮れてしまおう。「どうして出かけるんだ？」

「昨日話しただろ！ 樋口を尾行しに行くんだよ！」

トロンとした霧崎の双眸が、大きく見開かれた。

「 行動開始、か」

「 やる気出たか？」

「 十分」

人が変わったように手早く着替える霧崎が、最後に長いコートを羽織る。「せめてそのコートだけでも脱げば、ずいぶんマシになるんじゃないか？」との、響のもっともな提案は、無言で受け流された。まあ、いざとなれば無理やり引っ剥がせばいいだけの話だ。「あいつは何時に動くんだ？」

「今日の八時に、銀座のレストラン プライム・ロール で待ち合わせしてる」

あまりにもはつきりとした答えに、霧崎は驚いたように顔を上げた。「よく調べられたな」

「そんなに難しくもないよ。あいつが電話するときは、ほぼ生徒会室なんだ。よほどの用がない限り、生徒は入らないから。今日は四時間全て授業が入っていたから、電話するなら授業が終わった放課後しかない。相手の女も夜の商売、朝は遅いだろうしね」

「外で立ち聞きしたのか？」

「平たく言えばね」

万が一バレても、生徒会長ならば生徒会室に入るのは、ちっともおかしくない。気付かれるようなへマを、するつもりもなかったが。

「だから、これから服を買い変装してから、樋口を尾行する」

一つ、いいことを教えてあげよう。響が言った。

「樋口が売春していることは、実はほぼみんな知っているんだ。全クラス全生徒がね」

「は？」

「もちろん、その金が使い込まれたものとは知らない。しかし、それがわかれば、黒羽高全員が容疑者だ。完璧なアリバイがある者以外は」

「俺らに完璧なアリバイはないだろ」

「なければ、作るのさ。完璧なアリバイをね」

鏡を見て服装を整えながら、響はさらに続ける。「その方法については、後で教えるよ。それよりも、さっきの続きだ。学生とというのは不思議なものでね。普段はいがみ合っている生徒でも、大人に対しては協力して構えていくんだ」

「大人　つまり、警察もか」

「その通り。警察なんて来たら、もう協力とかいうレベルじゃない。軽い連合軍だよ」

「冗談めかして、響は軽くウィンクした。

「キザなやつ」

「それはどうも」

外に出ると、鮮やかな青空に、かすかに雲が浮かんでいた。かろうじて枝にしがみついている数えるほどの桜の花を、風がゆつくりと揺らしていく。「高麗屋でいいだろ？」

歩いて十五分ほどのデパートの名前を出すと、霧崎は無言でうなずいてみせた。

「あんたみたいな優等生と、並んで歩くことになるなんてな」

「どういう意味だよ？」

「成績優秀の生徒会長。正直、担任から聞いたときは、反吐が出そうになった」

「ひどいな」

「あの時は、あんたがこんなにも、狂ってるなんて知らなかったからな」

人生つてのは、何かあるかわからない。ふざけるような口ぶりの霧崎に、響は自然な口調で言う。「運命さ」

響も同じことを考えていた。学校にも来ていない男と、こうして談笑するとは夢にも思わなかった。まさか共犯者がこの男になるうとは、想像もしなかった。

学校に来ていない接点のない男が、こんなにも簡単に『完全犯罪

を犯したい』なんて誘いに乗るのが、響は同時に不思議でもあった。さりげなく問うと、「あんたがどこまで狂ってるのか、興味もあったしな」と返ってきた。

「どういう意味だ？」

「どういう意味だろうな？」

「僕が狂っている？」

ははは、と笑ってから、響はにっこりと微笑んだ。

「そうかもね」

その微笑に、霧崎の背筋に寒気が走る。

本当に、どこまで狂っているのだろうか。この同級生である優等生は。

あと3時間で(前書き)

第9話です。よろしくお願ひします。

あと3時間で

隣の霧崎の眼光が、二割増鋭くなっている気がする。まあ、道行く人々の足並みは早く、異常に目つきの鋭い男に目をやる暇人などいなかったのだが。

「おい、いい加減にしるよ。いつまでへそ曲げてるんだ」

慣れない人ごみに放り込まれ、霧崎は明らかに不機嫌そうだった。霧崎には縁遠いであろう洒落た流行の服を買い、目立つ長髪は短く見えるよう、うまく編み込んでみた。

にしても。響は小さく息を付いた。どこまでもわがままな奴だ。

「こんなので本当に大丈夫なのか？」

「緋月」

「どうした？」

さつき、一度家に帰ってきた。響の言う『完璧なアリバイの作り方』の、あまりにも犯罪者的な思考に、霧崎は内心驚いていた。

響曰く、今日父親が帰るのは十時を過ぎる。父親の言う時間の誤差は、ほとんどない。さすがと言うべきか。時間の誤差がほとんどないというのもそうだが、こうまで冷静かつ完璧に身内を考察するのも、響らしい。

さらに緋月家では、響の風呂の順番は、父親の後。和子たちと夕食をとった後、部屋に戻った二人は、響の部屋の窓から目の前の木に移り、庭に降りたのだ。

その木は本当に目の前にあり、しかも大きかったため、安心して移ることができた。しかし……。確かに運動神経は悪い方ではないが、普段運動をほとんどしない霧崎にとっては若干疲れるものであった。

「母さんたちは、僕たちが部屋にいると信じて絶対に疑わない。彼女たちは、そういう性格だ」

鍵をかけ、「もうすぐ模試だから」と、了解をとっておいた。絶

対的な信頼を得ながらも、それを簡単に裏切れる響が、霧崎は恐ろしかった。

待ち合わせの時間まで、あと一時間。そろそろ店に行った方がいいかもしれない。

霧崎にそう告げ、響は方向転換する。妙に似合っている、響とデザイン違いのキャップのつばをつかみ、霧崎は言った。「本当に、後悔しないのか」

響のポケットには、家の引き出しの奥に眠っていたカッターナイフが入っている。もう家族全員が忘れてしまっているようなそれなら、却ってバレないと思った。このカッターナイフを買った店は、もうずっと前につぶれてしまったし。

「後悔？」

霧崎が、人ごみの中立ち止まる。同じく止まろうとした響は、危うく人ごみに流されそうになり、何とか踏みとどまった。

「するはず、ないだろ？」

何を今さら。ため息混じりに言う響は、女性が思わず見惚れるほどに美しい。

「僕は、言い切れるよ。『絶対に後悔しない』と」

「それは俺もだ」

「なら、いいじゃないか。それで」

「……そうだな」

「どうかしたのか？ 一日しか話してないけど、わかるぞ」

「別に」

霧崎が、ジーンズのポケットからチョコレートを出して頬張る。自分でも何が言いたいのかわからなかった。

しかし、確かめたかった。本当に後悔しないのか……と。

人ごみの中、いつまでも立ち止まっている二人を、人々が怪訝そうに眺めていく。

「行こうか、霧崎」

響が静かに言った。「今から三時間後、僕たちは犯罪者だ」

プライム・ロール は、ずいぶん洒落たレストランだった。店の雰囲気からして、食事が高そうなのがわかる。

「席、ありますか」

「はい、ございます。二名様ですか？」

「奥の方の席をお願いします」

「かしこまりました」

うまい、と霧崎は思った。一番混む時間帯の直前ならば、店員はほとんど客の顔を見ないし（それどころではないのだろうが）、待たないのならば名前を書く必要もない。

「こちらです」

「どうも」

テーブルにつき、適当に軽いものを注文する。響はポケットにさり気なく手をやり、カッターナイフがあるのを確かめた。

「いよいよ、か」

響の口から嬉しそうな声がもれる。目を細め、まるで子供のよう嬉しがる響を、霧崎は静かに見つめた。

「長かった……何年待ったかな」

「それほど殺したくて、どうして殺さなかったんだ」

どこかで聴いたことのあるクラシックが、店内の雰囲気を引き立てている。尋常ではない二人の知識は、すぐに曲名を脳内から引き張り出した。ベートーベンの、『月光』。

「待っていたからさ、お前のような人間を」

乾杯、と響が笑う。ワインで、というわけにはもちろんいかなかったが、冷え切った水は乾いた喉には気持ちよかった。

「 どうして、俺だったんだ？」

席に届いた食事を口にしながら、霧崎は相変わらずの小声で言う。二人の座る一番奥の席は、店内全てを見渡せた。樋口はまだ来てい

ない。

「正直、誰でも良かったよ。冷徹、かつ信用できる頭のいい奴なら
「それなら」

「言っただろ？ 第一印象でわかることは結構多い。それはある種の、勘とも言えるような直感ともつながっている。僕はお前という人間を見て、直感で『こいつだ』と悟ったのさ」

「俺は優等生サマのお眼鏡に叶った、ってわけか？ 光栄だな」
届いたデザートはチョコレートケーキだった。味が、見た目が、材料が、と女子高生のごとく批評を飛ばし、思わず目的を忘れることはもちろんない。その何分か後に、二人は樋口が来店するのを確認した。

響は、樋口に背を向けている。いくらいい加減な教師とはいえ、さすがに生徒の顔くらいは覚えていたろうし、しかも響は生徒会長だ。

席が離れているとはいえ、顔を見せるのはリスクが高すぎる。

「来たな」

「全く……。せつかくの高いスーツだろうに、悲しいくらい似合っていないな」

優雅に前髪を掻き上げる響に、緊張の色は微塵も見られない。霧崎も、ケーキの上に乗った飾りを、宝石のように扱って口に含んだ。樋口と一緒にいる女性は、やたらとはしゃいでいる。派手な化粧と露出の激しい服のせいで年齢がわかりにくいがおそらく二十歳前だろう。

「……いかにも、って感じだな」

「いつの時代も、売春女つてのは変わらないな」

派手に巻かれた髪の毛が腕に腕にかけ、へらへらとした笑みをさらす樋口のわかりやすさと、それに対する霧崎の台詞に、響は思わず笑いそうになった。

「しかし、恐ろしいな。売春女にかかれれば、髪の毛さえも武器になるんだな」

「使えるものは使うんだろ。まったく女つてのは怖い」

「なんだ、知らなかったのか？ 女つてのは、基本的に怖いんだぞ」

「あいにく俺はあんたと違って、女には縁がないんだ。 草食系

男子だからな」

「どこで覚えたんだ、そんな言葉？ って言うか、意味違ってないか？」

小声で軽口を叩き合う二人は、やはり一見普通の高校生だ。

「お」

「やっと動いたか」

しばらくして立ち上がった樋口たちを、すぐに霧崎が追う。響も素早く財布を出し、あらかじめ用意してあった料金を払った。

人ごみに混じって怪しまれない程度に機敏に動く霧崎に追いつき、二人は樋口に気付かれない距離を保ちつつ尾行を開始する。

「どこに行くと思う？」

「ホテル」

響の問いに返ってきたのは、この上なく簡潔な霧崎の答えだった。

そして彼らは日常にサヨナラを告げた（前書き）

第10話です。よろしくお願いします。

そして彼らは日常にサヨナラを告げた

けばけばしい蛍光ピンクの壁と、見ていて目が痛くなるほどのネオン。絵に描いたようなラブホテルから二人が出てきたのは、あれから一時間後だ。いい加減待ちくたびれたと不満そうな顔を見せる霧崎とは対照的に、響は時間が経つほどに目を輝かせていた。

「また誘ってね」

いつそ毒々しいほどのピンクの唇が、酒でも飲んだのか、赤い樋口の頬に触れる（触れると言うよりは、むしろ押し付けると言った方が明確かもしれない）。

樋口はその行為にニヤニヤと笑い、思い出したように持っていた鞆を女に手渡した。高そうな革の鞆を、女は嬉しそうに受け取る。

「また、えらくごてごてした鞆だな」

「相当高いぞ、あのバッグ。母さんの好きなブランドの新作で、ネットでも話題になってた」

女は通りに出てタクシーを拾い、樋口に手をヒラヒラ振りながら去っていった。「行くぞ、霧崎。樋口が一人だ」

さつきゴミ捨て場で拾った薄いゴム手袋を付け、響は小走りに樋口を追った。酔いを覚まそうとでもしているらしく、ヨロヨロと千鳥足で樋口はあっちこちを歩いている。

響は静かに深呼吸した。

「樋口先生」

周りに人は誰もいない。

ラブホテルが立ち並ぶ通りの裏。ある意味一番人がいない、静かな場所。

「緋月……？」

焦点が合っていない目が、響の持つカッターナイフを映す。瞬間、自分の置かれている状況がわからないと言ったように、見開かれる双眸。

「な、なんだそれは……！」

霧崎が後ろに回り込み、樋口を羽交い締めにする。細身な割に力のある霧崎と、すっかり中年太りの仲間入りをし、しかも半分酔っ払った樋口。どちらが力が強いかなんて、考えるまでもない。

「離せ！」

「やかましい奴だな」

霧崎が舌打ちでもせんばかりの表情で言う。「俺はうるさい奴は嫌いなんだ」

「奇遇だな、霧崎。僕もだよ」

カッターナイフの刃が、ネオンの光を受けて一瞬光った。

「霧崎、口塞いでくれ。大声出されたら厄介だ」

「ああ」

と、答えたあと霧崎は思わず言葉を失った。

につこりと満面の笑みを浮かべた響は、カッターナイフの刃を愛おしそうに眺め、それからゆっくりと樋口に向き直る。

今まで見たことがないほど、美しい微笑。

「さようなら。樋口先生」

三秒後。響の持つカッターナイフが、赤く染まった。

いれでよかつたんだ(前書き)

第1話です。よろしくお願いします。

これでよかつたんだ

次の日の朝、黒羽高では緊急朝礼が行われた。

七時半からの朝講習をつぶし、慌ただしく体育館に集められた生徒たちは、ただならない学校の雰囲気戸惑っている。

「おはよう」

「あ。おはよう、緋月くん。一体どうしたんだろっかね？」

三原が不安げに眉を寄せている。体育館にはまだ教師たちは来ていないため、生徒たちはそれぞれ好き勝手に話している。「さあね」

「三年生だけじゃないよ。全校生徒が集められてるみたい」

「盗難……があつたにしては、不自然だな」

霧崎はその台詞を聞いて吹き出しそうになった。響の胸ポケットには、小さな盗聴器が仕込んである。そのデータは響の部屋の霧崎がつけているイヤホンに送られるようになっていたのだ。

「学級委員は、各クラスの生徒を並ばせなさい！」

女性教員が、甲高い声で怒鳴っている。響はツカツカと、生徒会長立つ場所に歩いていった。三原も後から小走りに走ってくる。

「何があつたんですか？」

「今から説明します！」

やってきた他の教師たちも、どこかピリピリした雰囲気だ。響はいかにも何も知らないといったように、しかし自分の役割は果たさなければといった風を装って、教師に言った。「先生。各クラスごとに点呼を取らせましょう」

「そ、そうね。各クラスごとに点呼しなさい！ 全員揃ったら座りなさい」

三年生はさすがに並ぶのも早く、ほとんどの学級委員が前の教師に報告に来た。しかし、やはり学校生活に慣れてきたばかりの一年生は、明らかに遅い。一年生たちが並ぶ頃には、自宅の霧崎は板子ヨコを一枚たいらげていた。

「みなさん」

校長が前に立った。「今日は非常に残念なお知らせがあります」

響は生徒たちの表情を注意深く観察していた。三年生のうち何人かに浮かぶ眠そうな顔。一年生のほとんどが浮かべる、早く終わればいいという表情。隣の者と視線を交わす二年生たち。

「本校教員の樋口先生が、昨晚お亡くなりになりました」

痛いほどの沈黙が、体育館に流れた。さっきまで無関心だった生徒たちの表情は、すべてが驚愕に染まっている。

「マスコミから何か聞かれても、決して答えないようにすること。また、何か知っている者は私のところまで来なさい」

そこで一礼する校長。隣の三原が目を見開いている。

「以上です。一年生から教室に戻りなさい」

「樋口先生が死んだなんて、天罰が当たったのかもね」

「驚いたな」

響は三原の表情に内心ほくそ笑んだ。これでいい、これで良かったんだ。樋口はやはり社会のごみであったと確信できた。

生徒会長と副生徒会長は、立场上最後に体育館を出ることになる。ざわめきが嫌でも耳に入ってくる廊下を歩きながら、響たちは授業開始のチャイムを聞いた。

教室に戻ると、野球部の男子たちが、大声で笑いあっていた。響が、どうかしたのか、といったように視線を送る。野球部メンバーが、大げさな身振りで騒ぎ出した。

「天罰だって、天罰！ 緋月もそう思うだろ！」

「天罰……ああ、樋口先生か」

「そ。学校の経費使い込んだやつなんて、死んで当然だろ！」

「しかもつぎ込む先が女だろ。救えねー！」

「まあ、こんなありきたりな事件、マスコミも喜ばないよ。警察がすぐに犯人を見つけるさ」

「学校とか家とかに警察が来たら、かなり面白くないね？」 『重要参考人として、話を聞かせてくれたまえ』とかさ」

「お前、それだったらお前が犯人になるぞ」

「俺が犯人なわけないだろ。あー、なんか面白いことになればいいのになあ」

面白いこと、か。響は笑みを浮かべたままテキストを出す。今日の一時限目は数学だ。

現場には誰もいなかった。霧崎が話すわけもない。樋口は即死だった。自分が疑われる要素など、何もない。

さあ、次は誰を殺そうか。

私立探偵（前書き）

第12話です。よろしくお願いします。

私立探偵

それから二か月が経った。

有名高校の教師の死から、立て続けに起こった殺人事件。好き勝手に騒いでいたマスコミたちの勢いは、増し続けるばかりだった。しかし時というのはなかなか不思議なもので、響たち黒羽高校生は、やっといつも通りの生活を取り戻そうとしていた。

ほとんどすべてが日常を取り戻したように見えた。けれども問題は、犯人の目星が全くつかないことだったのだ。

最近のニュースでは、二、三日経ったらすぐに犯人が捕まっていた。しかし今回の事件では、犯人どころか未だ容疑者も見つかっていないのだ。

「何見てるの？」

ほっそりとした色の白い女性が、パソコン前の少女に英語で声をかけた。淡い色の金髪が、ちょうどよい角度で色素の薄い顔を隠す。さながらピアニストのような、白いフリルシャツと黒の長いスカートがよく似合っている。

ここはアメリカ。ニューヨークにある豪華な屋敷の一室に、二人の人影があった。

「日本の事件だよ」

「日本？」

話しかけられた少女は同じく英語で返し、カシヤカシヤとキーボードを叩いた。ディスプレイに浮かぶ画像。「これが被害者」

「そんなの見て面白いの？」

「面白いよ」

あっさりと言いつつ少女に、女性は少し不満そうに顔をしかめる。少女はそれに敏感に気付き、楽しそうに笑った。

「そんな顔しないでよ」

「だって、年頃の女の子の趣味が、殺人事件の調査なんて……」

「そればかりじゃないでしょ。わたしだって、日本のカラオケとかプリクラとか好きだよ」

「そうだけど……」

「ねえ、モア。ミルクティー、もう一杯」

いたずらっぽく笑う少女に苦笑して、女性は部屋の隅に歩を進めた。「あと、久しぶりにスコーンも食べたいなあ」

「最近太ったとか言っただけ？」

「……ちよつとだけ」

「じゃあ、スコーンは我慢して」

静かに笑う女性　モア・ヘルマンに文句を言いつつ、少女は再びパソコンに向き直った。

彼女はコヨーテ。まだわずか十七歳にして、れっきとした私立探偵だ。名前は明らかな西洋人らしさがにじんでいるが、黒い髪と瞳は、どう控えめに見ても東洋人のそれ。パツチリとした大きな目は、パソコンの画面を食い入るように見つめている。

生まれついでの高い知能指数と、何でも知りたがる旺盛な好奇心、保護者の十分すぎるほどの援助。それら三つとアメリカの飛び級制度を利用して、彼女はすでに大学を卒業した。

「日本の事件、最近はすぐに犯人が見つかったのにな」

「今回は違うの？　はい、ミルクティ」

茶色の猫が、コヨーテの膝に飛び乗る。「違うよ。　ね、ワトソン」

道端で拾った可愛い愛猫。舞い散る毛が入らないよう、コヨーテはサツとミルクティのカップを持ち上げた。そのままゴクゴクと、一気に半分くらい飲んでしまう。

「ちよつと甘いなあ」

「前は、そのくらいがちよつといいって言ってなかった？」

「それ何年前の話？」

肩を少し過ぎるくらいの髪の毛がうっとうしかったのか、彼女は笑いながら、手首につけてあるシュシュで結び上げる。いくら私立探偵であろうとも、まだ十七歳。手首のシュシュは、単に日本の雑誌の真似だ。

それにしても。コヨーテは考え込んだ。こんなに殺人事件が続いて逮捕できないのは、いかななものか。

日本の警察も、そこまで馬鹿じゃない。警察のコンピューターから見る限り、優秀な人材は何人もいたし、なかなかの難事件を解決した人物を内心で勝手に誉めたりもしていた。しかし、ほとんど捜査が進んでいない。「どんな事件なんだろうね」

「その事件？ そんなの、警察のデータベースに載ってない？」
「載ってるよ」

勝手に身に付けたハッキング技術は、今まで多くのものを自分に提供してくれた。「ただ、こういうのって実際に行かなきゃわからないこともあるんだよね」

「え……」
「決めた」

コヨーテは嬉しそうに笑ってワトソンを抱き上げたまま立ち上がる。

「ねえ、モア。わたし、日本に行く」

侵入（前書き）

第13話です。よろしくお願いします。

侵入

その五時間後。彼女とモアは、国際空港に立っていた。国籍や年齢も、すべてがごちゃ混ぜな空港。フィッシュアンドチップスを頬張るコヨーテの横で、モアは不安げにキョロキョロしている。

「食べる？」

「いらないわよ。　　ねえ」

「ん？」

大きな日除け帽に巻かれたスカーフが、動きに伴って揺れている。与える印象が薄いせいも、モアの美貌に気付く者は少ない。下手な女優よりも美人だと知っているのは、コヨーテくらいだろう。「また危険なまねするつもりでしょう」

「いいでしょ。これで事件が解決したら、向こうも願ったりよ」

「それにあなた、日本語しゃべれるの？」

「しゃべれるよ。　　本日は晴天なり」

コヨーテの口から急に飛び出した流暢な日本語に　　意味はわからないが　　モアは目を見開いた。「おじいさまの書斎には、捨てるほど本があつたからね。暇があつたから読んでみたんだ」

異国の言葉を一目見て覚え、使いこなせるのは天才的と言わざるを得ない。モアはそれでもなお、心配そうに目を伏せている。「嫌な予感がするのよ」

「モアの勘は当たるからね。今日の晩ご飯に、ピクルスでも出るのかな」

不満げに頬を膨らますモアに、コヨーテは思わず吹き出した。

アテンションプリーズ。聞き取りやすい英語がマイクから流れてくる。

「それじゃあ、機内食にピクルスが出ないことを祈って」

そう、おどけてみせたコヨーテは、どこにでもいるような女子高生にしか見えなかった。

「緋月くん」

世界史の教師が、メガネをずり上げながら走ってくる。「何でしよう」

「ちよつと、応接室に行ってくれ。転校生を紹介したい」

「紹介……？」

「いや、君のクラスに編入してくるんだ。教室まで案内してやってほしい」

「わかりました」

朝のHR終了後。授業が始まる前に遅い朝食を取る者もいれば、一時間目の予習を慌ててしている者もいる時間帯。日直として連絡掲示板を見に来たはいいが、あいにく今日は特に予定は無いようだった。「失礼します」

ネクタイが曲がっていないのを確かめ、一般的に言う人当たりのよい笑顔を浮かべてから、響は応接室に入る。机と書類の匂い。その中で、紺色のセーラー服に身を包んでいる1人の少女。「高野先生に言われて来ました、緋月です。編入された方かな？」

少女がこちらを向く。ぱっちりとした大きな目に、響が映った。

「林 杏里です。よろしく」

「この時期の編入生なんて、珍しいですね。僕は生徒会長で、林さんを教室に連れてくるように言われました」

黒羽高の女子用制服とは違う、紺に白のラインが入ったセーラー服。響の視線に気付いたらしい杏里は、笑いながら言った。「まだ黒羽高の制服が届いてなくて。これ、前の学校の制服なんです」

胸元の白いタイは、少しでも綺麗に見えるよう、丁寧に結ばれているのがわかる。お世辞にもオシャレとは言えないダサイ制服が、できるだけ可愛く見えるように努力する、普通の女の子といった印象。緩やかにカールした黒い髪が、冷房になびいていた。「林

さん、だっけ？」

「うん。普通に呼び捨てでいいよ」

「慣れたらね」

気のない返事をしつつも、響はふわりと笑う。杏里も「今すぐには呼んでくれないんだ」と、笑って返す。

「じゃあ、教室行こうか。そろそろ一時限目始まるから、」

「うん。あ、緋月くんって何部？」

「化学部。林さんは何か入るの？」

杏里は口元に手を当てて考え込む。「何にしようかなあ」

「部活は見学できるから、そんなに焦らなくても大丈夫だよ」

そうだね、と。いたって普通の感じのいい笑みに、杏里はい

や、コヨーテは 微笑み返した。

課題（前書き）

第14話です。よろしくお願いします。

課題

すでに、響たち『クラッシャー』による被害者は、10人を越えている。刺殺、撲殺、原因不明の自殺。被害者らの死に、共通性は何もない。さらに恐ろしいことに、容疑者が見つからない殺人事件は、自動的にクラッシャーの仕業にされるほどだった。

「霧崎」

響は部屋に帰るなり、上機嫌の顔で言った。「面白いことになった」

「杏里とかいう女のことか？」

「ああ」

鞆をベッドの脇に置き、返事もそこそこにパソコンを立ち上げる。ブックマークしてあるサイトを開くと、霧崎がのそのそと移動した。アイスの練乳が、手の甲に落ちる。

「どれだ？」

「ほら、ティッシュ。これだよ」

響が画面の写真を見せた。下に書いてあるのは名前だろうか。画面いっぱいには並ぶ英語に、霧崎は顔をしかめる。

「読めないわけじゃないだろ。まあ、霧崎は盗聴器からでしか、会話を聞けなかったから、ピンと来なくても仕方ないな。ここに載ってる女は、今日の『林杏里』だ」

「は？」

そこに出ているのは、明らかにその女のプロフィールだった。「国籍不明。年齢不明。職業は私立探偵……私立探偵？」

「国籍不明、年齢不明。だけどまあ、十分高校生で通る。変装の可能性も否めないけどね」

「そんな話じゃないだろ。どうしてアメリカの私立探偵が俺らのところに」

「落ち着けよ、霧崎」

そう言う響の顔に、焦りは微塵もない。想定内。そんな顔だ。「
彼女が解決した事件は、なかなか難しいものばかりなんだ。世間
は公表されていないけど、かなり有能なはずだ」
「どうして日本に？」
「決まってるだろ」

『クラッシャー』さ。

「は……？」

「クラッシャーの事件を、調べに来たんだ」

「なら、何故黒羽高に……」

「忘れたのか？ クラッシャーの最初の被害者は樋口だ」

つながった。響はうなずいて、霧崎からアイスを引ったくる。「

おい……」

「お前はずつと涼しい室内にいるからいいけどな。外はそろそろ夏
だ。暑いんだよ！」

「ちっ……」

「とにかく今の課題は、あの女の捜査の進行具合を探ることだ」

霧崎は今、長い髪の毛をポニーテールにしている。響はそれを片
手で弄びながら、パソコンをシャットダウンした。

「モア、ミルクティー」

杏里 いや、コヨーテの両の手は、せわしなくパソコンのキー
ボードを叩いている。その状態でどうやって飲むのかしらと疑問に
思いながら、モアはコヨーテお気に入りの茶葉で紅茶を作る。「は
い、コヨーテ」

「ありがと。……あ、手が1本足りない」

気が付かなかったらしい言い方に、モアは苦笑してストローを差

す。右手だけでキーボードを叩きながら、コヨーテは肩をすくめた。

「すごいね」

「何が？」

「今回の事件。犯人に、『クラッシュヤー』って呼び名まで付いてる」

「どうやって捜査するの？ アメリカと違って、日本ではあなたの名前そんなに知れてないでしょ」

「うん。だから、自分で犯人をあげる。もちろん警察の協力も必要だから、警部にコッソリ話を通してもらうよ」

コヨーテの言う警部は、アメリカ警察で働く、コヨーテのよき友人でもある人物のことだ。友人といっても、30歳以上年は開いているが。

「あ、ねえ、モア」

「なに？」

ミルクティーのおかわりだろうか。空になっているカップを見て、モアは新しく作る準備をする。

「学校で、どっさり課題が出たんだよね。代わりにやってくれない？」

不思議（前書き）

第15話です。よろしくお願いします。

不思議

「お兄ちゃん、お兄ちゃん！ これ教えて！」

「どれ？」

「これ。かつこの3番」

琴美の苦手な平面図形。響はテキストの余白に、サラサラといくつかの数式を書いた。「こないだの問題と、基本的な考え方は同じだよ」

「え、なんで？ だって、こないだの問題は全然違う形だったのに」

「違う違う。だからこれは」

「へロン」

リビングのテーブルに頭を寄せて勉強する2人の手元に影が落ちる。琴美が顔を上げると、霧崎は無表情のまま続けた。「へロンの公式って知ってるか」

「ううん、知らない。それ、何なの？」

小首を傾げる琴美の視線を受け、霧崎は静かに講義を始める。すっかり緋月家になじんだ居候に、琴美はすっかりなついてしまった。「式に当てはめるために、この長さを求める。このことこのこと、この三辺で解ける」

「あれ？ え、あ、ホントだっ！？ ありがとう、霧崎さん！」

驚きながらも、新しく習った公式を繰り返して書く琴美。そろそろ受験に本格的に取り組む時期だ。「公式は書いて覚えるな。実際に使って覚える」

兄が2人できたようで、嬉しいのだろうか。注意されたのにも関わらず、琴美は上機嫌だった。

「さあ3人とも、そろそろご飯よ。片付けてちょうだい」

「はあい、お母さん」

「霧崎さんも手伝ってくれる？ お皿はその戸棚だから……」

うんともすんとも言わず、ただ立ち上がる霧崎に、和子は嫌な顔

1つしない。人情味あふれるその性格に、響は内心だけで感謝した。

響の頭を悩ましたのは、2人の連絡手段だった。

電話、メール、手紙。

手紙はもちろんメールも、証拠となるものが残ってしまふ。しかし殺人計画には、正確な日時と時間の打ち合わせがいる。

喫茶店などで話し合ったとしても、どこで誰に聞かれているか、わかったものではないのだ。できれば、1回目のおきのように自室で計画を立てたい。

考え抜いた末、響はある種賭けのような行動に出た。

「母さん、霧崎のことだけど」

夜遅く、皿洗いをしていた和子に、響は真剣な顔をして話しかけた。「どうしたの？」

「大事な話があるんだ。それが終わったら、座ってよ」

響も椅子を引き、腰掛ける。いつもと様子がまるで違う響に、和子は不思議そうな顔をしてから、手早く台所を片して響の正面に腰掛けた。

「珍しいわね。響がそんな怖い顔するなんて」

「大事な話なんだ」

「はいはい、何かしら」

響がフツと悲しげな顔になり、うつむく。普段から強気な響がうつむくことは、めったにない。そのことを十分知っている和子は、思わず表情を曇らせた。

「霧崎の奴だけだ。あいつ今、親いないんだ」

「え？」

「こないだ偶然図書館で会ったんだ。一応クラスメイトだったし、色々話したら 親に捨てられたって言ってた」

「本当なの？」

「あいつも、もう高校生だし自炊はできてるらしい。それに、本人は寂しくないって言ってたけどさ。……僕には、母さんや父さんに、琴美もいる。でも、あいつには誰もいないんだ。」

ある日いきなり親がいなくなるなんて……。あいつと話したのは、確かに、こないだが初めてだよ。だけどなんか……。ほっとけないだろ……。？」

「響」

細い響の髪を、和子が梳いた。自分の知らぬ間にずいぶんたくましくなった身体を、そっと抱き寄せる。耳元で聞こえる息子の嗚咽が、和子の胸を打った。「いいわ。いつまで置いてあげられるかわからないけど、できる限り霧崎さんの面倒は見てあげる」

「母さん……？」

大丈夫よ。

そう言った和子の笑みは、昔と何も変わらず、響を安心させるものだった。

それがおそらく3日ほど前のこと。霧崎はだいぶ緋月家になじんできた。おかげで2人は何も心配せずに、殺人計画を立てることができた。

和子には、決して誰にも口外しないように言うておいた。もちろん、琴美と父親にも。

「皿、これでいいですか」

「ありがとうございます。ほら、響たちも早く手伝いなさい」

「はい。ねえ、霧崎さん。後で4番も教えて！」

「ああ」

「何だ、琴美。僕はもうお払い箱か？」

「お兄ちゃんより、霧崎さんの方が優しいもん。こないだお兄ちゃんがいなかったときね、ポッキーもらっちゃった」

えへへ、と、いたずらっぽく笑う琴美につられ、響と霧崎も思わず笑ってしまう。

ああ、不思議だ。自分たちは殺人犯なのに。今世間を騒がせている、クラツシャーなのに。こんなにも楽しそうに、自然に笑っている。この幸せな家庭の中で。

「今日は豚キムチチャーハンよ。おかわりはたくさん作ったからね」

「やったあ！ お母さん、私おかわりするからね！」

「お前、もう中3だろ？ まったく、色気より食い気か……」

「もう、お兄ちゃんうるさい！」

「ほらほら。2人とも、やめなさい。はい、いただきます」

「いただきます！」

できたてでアツアツのチャーハンを、それぞれが頬張る。熱い、辛い、おいしい。それぞれの感想が、食卓を飛び交う。

この幸せな家庭の中には、確かにある。自分たち殺人犯の居場所が。

ああ、不思議だ。

理想（前書き）

第16話です。よろしくお願いします。

理想

セーラー服が気に入ったから。

そう言っつて、部屋に帰っつてからもセーラー服でいるようになったのは、つい最近のことだ。アメリカには制服といったものがないから、新鮮なのだろう。

そこまで考えて、モアは小さなため息をついた。「杏里」

「うん」

「今日の晩ご飯、何がいい？」

「うん」

「ジャパニーズフード？」

「うん」

「……ファーストフード？」

「うん」

机に積み上げられた事件の調書。一枚一枚丁寧に目を通すコヨーテを見ながら、若い男性が苦笑した。

「すごいなあ。女子高生で、こんなに熱心に事件に取り組むなんて」

「うん」

「僕なんか、毎日課長に怒られてばかりですよ」

彼の名前は藍川^{あいかわ} 秀^{しゅう}。警視庁の刑事で、クラッシュヤー事件を担当している1人だ。

アメリカの警部から、日本警察に話が通つてから2日後。コヨーテとモアは荷物を持って、警察庁の近くのマンションに部屋を借りた。

その際、顔を見られるのは不都合だからと、コヨーテが中継役を指定。口が固く、捜査に参加しなくても、支障が出ない人物。それが、藍川刑事だった。

「ねえ、藍川さん」

「はい！　なんでしよう、杏里さん！」

コヨーテの名は伏せてある。使い分けができるモアのように、藍川がそれほど適応能力があるようには見えなかったからだ。「高校のときの得意教科は何？」

「はい、体育が得意でした！」

「5教科に決まってるでしょ」

コヨーテの呆れたような目に、日本語がわからないモアもクスクスと笑う。そのままさりげなく出された麦茶に、藍川は「おっ」と言って一気に飲み干した。

「課題が出ちゃったんですね、大量に」

「高校生ですからね！　僕は課題はやらない派でしたけど！」

「そういうわけにはいかないでしょ」

コヨーテは深くため息をついて、頭を抱えた。その側で、パソコンのプリンターから次から次へと資料が印刷されてくる。「課題はきっちりやって、それでいて勉強には時間を割きたくないです」

「どういうことですか？」

「『ほどよく勉強し、適当にテストを乗り切り、一生懸命に部活に取り組む、友だち付き合いのよい女子高生』。理想的な林杏里は、そんな女の子」

「理想的って……ああ、そうか。杏里は偽名なんでしたっけ」

「うん。あ、テストは心配いらないよ。日本語に『敬語』って概念があるのは知ってるし、使い方も完璧なつもり」

「はあ……。すごいですね！」

バサバサと印刷した資料をたたむコヨーテの横で、藍川が目を輝かせている。「だから、聞いたのよ、得意教科」

「そうですね。国語と英語でしょうか！」

「文系だったんだ？」

「はい！　数？Cが嫌で、文系に行きました！」

……彼はどこまで本気なのだろうか。考えられる限り、文理選択の最悪の選び方だ。コヨーテは痛む頭をブンブンと振り、ケータイ

を取り出した。「とりあえず、メアド交換をお願いします」

「え！ 自分のですか！」

「当たり前でしょ」

「いやあ、なんか照れちゃうなあ」

「は？」

「現役女子高生とメアド交換なんて、憧れてたんですよ！」

「……はあ」

全力でハイテンションの藍川は、コヨーテの疲れた顔に気付かない。藍川を中継役にしたのは、失敗だったかもしれない。そこまで考えて、コヨーテはかぶりを振った。

モアがいる。いざという時、自分ではなくモアを守れるのは、『杏里』に忠実で素直な人間だ。単に事件を解決することだけを望んでいるのなら、すぐに『杏里』を守るに違いない。

「あ、モアさん！」

ニツと人懐っこい笑顔を向ける藍川に、モアが少しだけ首を傾げる。「モアは英語しかわかりませんよ」

「あ、そっか。えーと……ティー、プリーズ！」

本当に文系か、というくらい見事なジャパニーズイングリッシュ。それでも伝わるあたり、人のコミュニケーション能力というのはやはり高いのだろう。「OK」

微笑するモアに、自分もアイスティーを頼む。そして、「今夜はジャパニーズフードがいい」と、さっきの問いに答えておいた。

完璧な先輩（前書き）

第17話です。よろしくお願いします。

完璧な先輩

『林 杏里』が編入してきてから、早くも3日が過ぎた。響はいつも通り勉強に励み、いつも通りの学校生活を送っている。

「ねえ、緋月くん」
「ん？」

難関クラスにほぼ満点で編入したとの噂も流れたが、この学級で他人のことを気にしているような余裕は持てない。とはいえ編入して3日後には、もう授業の苦しさを共有する仲間として、女子の輪に受け入れられていた。「今日、科学部あるの？」

「ああ、科学部は毎日やってるよ。結構幽霊部員が多いから、なかなか全員揃わないけど」

「緋月くんは、今日行く？ 科学部を見学したいんだけど、ちょっと行きにくくて」

「いいよ。一緒に行こうか」
「ありがとう！」

目を輝かすコヨーテに、響は軽く微笑む。「緋月くんと話しちゃったー」と、ちょっとおどけて言う杏里は、本当に、いたって普通の女子高生にしか見えないのだ。

気を許すな。勉強のときだけかけるメガネを指先ですり上げ、気を引き締める。敵かもしれない。そんな甘い気持ちで接した時点で、自分の負けだ。

緋月響。

黒羽高生の中で、最も気になった人物だった。

コヨーテは、まず黒羽高生を徹底的に調べた。名前、性格、顔、

成績、趣味、その他個人情報。比較的優等生というべき人物が多い中、明らかに異彩を放っていた人物。それが、緋月響だった。

「うわっ！　こんなやつ、ホントにいるんですね！」

……という、藍川の感想も理解できた。

成績優秀、眉目秀麗。人付き合いがよく、教師からの評価もよい。このあたりではトップ高の、支持率過去最高の生徒会長。所属している科学部では、研究発表の化学部門で最優秀賞を取っている。さらに入学以来3年間、定期考査では不動の1位。

「気になるなあ、この人」

「お。恋ですか!？」

「違う」

ここまで完璧な人間には、誰もが裏があると疑うものだ。その疑惑をかくぐり、彼はいたって健全な人付き合いをしている。

「事件に関係あるかも」

「……それは、いわゆる女の勘ってやつですか？」

「いいえ」

外した音楽プレイヤーのイヤホンから、アップテンポの曲が流れ始める。手に取ったポツキーを、10秒ほど指揮でもするように振ってから、パキツと音を立てて歯で折った。「探偵の勘です」

……回想終了。すでに習得済みの授業内容を適当に聞き流しながら、コヨーテは襲い来る睡魔と必死に戦う。事件の被害者と黒羽高生のデータに目を通す作業に忙しく、3日間全く寝ていない。

「林！　聞いているか！」

「は、はい」

「1段落、全部訳してみる」

「はい」

十何年か慣れ親しんだ英単語の羅列。回らない頭を無理やり回し、予習もしていない文章を全て訳していく。「　つまりそれこそが、

私たちが解決すべき問題なのだ」

「……座れ」

面白くなさそうな顔。ある意味母国語なのだから、間違えることを期待されても困る。

座るとき、緋月響と目があつた。爽やかな微笑を向ける響に、「ヨーテは微笑み返した。

「次回は次の段落から入る。予習しておくように」

今日は少し睡眠を取ろうか。推理には適度な推理も必要だ。学級委員の号令に、動かない身体を無理やり動かして……。 「林さん、大丈夫？ ずいぶん疲れてるみたいだけど」

「あ……緋月くん」

「ホームルーム中也寝てただろ。そんなに無理しなくても、授業には着いていけるよ」

「緋月くんは頭いいからね」

「はは、林さんこそ。さっきの訳、予習してなかっただろ」

「前の学校では、そんなことする必要が全然なかったから……。いきなり当てられて焦っちゃった」

「それでも答えられるのはすごいよ。……あ、科学部室、行く？」

「うん、行く行く！」

響に近付いて、少しでも『緋月響』という人間を理解すること。

今はそれが最重要課題だ。

「科学部員はどんな人がいるの？」

「ほとんどが林さんの知らないやつだと思つよ。あ、三原ってわかる？」

「？」

「同じクラスの、あの三原さん？」

「そうそう。彼女も科学部」

三原綾子。2日前に頭に叩き込んだその名前を、データと共に頭から引つ張り出す。

この学校の副生徒会長。成績はそこそこ、容姿は中の上くらい。緋月に最も近い女子、ともいえるかもしれない。「ここだよ。第2

科学室」

建て付けが微妙に悪い戸を開けると、コーヒーの匂いが鼻腔をくすぐった。室内にいるのは、1年生らしき男子1人。

「……ちわッス」

「宝、またコーヒー飲んでただる。バレバレだよ」

「どうせ顧問にバレても、あの爺さんならうるさく言いませんからね。……彼女さんッスか？」

白衣を着崩した少年が、白いマグカップに口をつける。「クラスメートさ。ああ、林さん。彼は、宝^{たから}穂積^{ほしむ}。1年生だよ」

「私は林杏里。よろしくね、宝くん」

「……ッス」

ちよつと頭を下げただけで、後はコーヒーに夢中だ。ちよつと人を小馬鹿にしたような、格好をつけたような言動が様になっているのは、その器量ゆえだろうか。

「林さん、気にしないで。こいつ、いつつもこうだから」

「こつ、って何スか。……彼女さん、チョコクッキー食べますか」

「え、あるの？」

「違反ッスけどね。教師たちも、こんな細かいとこまではチエックしないんすよ。電気ポットは、俺が入部したときからあつたし」

「最初はインスタントコーヒーの粉だけだったんだけどね。それから、こいつがティーバッグとか、甘いものとか持ってきて。クールそうな顔して、甘党なんだよ」

「先輩は一言余計ッスよ」

クスクスと笑う宝と響。至っていい先輩。これは、なかなか化けの皮が厚そうだ。

……使い方、間違っていないかな。覚えてばかりの慣用語の使い方を、頭の中で確認した。

目撃者（前書き）

第18話です。よろしくお願ひします。

目撃者

樋口を殺してから、3ヶ月。

「見ろよ、霧崎！」

学校から帰るなり満面の笑みで、響は霧崎に雑誌を放り投げる。

「最高だ！」

「……あんたがそこまでテンションが高いのなんて、初めて見た」

「そりゃ、テンションも上がるさ。見てみるよ」

言われた通り雑誌を見ると、第一面のかでかとした文字が目に見え飛び込んできた。

「『クラツシャーの被害拡大。いまだ犯人の目星つかず』？」

「馬鹿だ。やっぱりこの世の中、中途半端な馬鹿ばかりだ！」

さらに笑えるのは、と響がページをめくる。どうやら、クラツシャーについての特集記事らしい。「最初の被害者ってことで、樋口は結構注目されてるみたいだ。うちの校長のコメントまで載ってる」

「『我が校の尊敬すべき職員の命を奪った殺人犯が、早く捕まるように祈るばかりです』。……こいつ、そっぴいえ俺の家に来たな」

「校長だからね。見たか、霧崎。馬鹿なんだよ、こいつらは。」

この校長が1番目をかけているのは、間違いなく僕だ」

舞台上にでも立った俳優のように、響は大げさな動作で続けた。「樋口が死んだ日に、僕は廊下でたまたま校長に会った。何て言ったと思う？ 『みんな混乱しています。生徒会長がみんなを引っ張ってあげてください』だってさ」

一瞬の間を置いて、響が笑い出す。「僕なんだよ！ 『尊敬すべき職員』を殺したのも、生徒を混乱させているのも！ 世間を騒がせているのも、壊しているのも、すべてこの僕！ 緋月響なんだ！ 『……イカれてやがる……！』」

「壊してやるよ。もうすぐで、おそらく警察が全力を上げて動き出す。欺いてやるよ。警察も教師も、女探偵も」

気持ちが高ぶっていたからだろう。
冷静さを欠いていたからだろう。
理由は後からいくらでもつけられる。とにかく1つだけ、言えること。

響はその日の犯行で、ミスをした。

+++

ターゲットは、産婦人科で働く40代女性。ターゲットに決まった理由は、単にそろそろ自分自身でも殺人をしておいた方がいいと判断しただけだ。『不運』としか、言いようがない。

隣には霧崎。手にはどこにでもあるスポーツタオル。父親が人からもらってきたものだし、凶器からバレる心配はない。

小走りでコンビニから出てきた。制服らしきものを着ているあたり、夜勤途中に買い物にでも来たのかもしれない。

殺す場所は、人目につきそうもない路地裏。母親は出かけている、兄が部屋を抜け出して人を殺しに行くなんて考えるほどの想像力は、琴美にはない。「人」

人はいないか？

おそらくそう聞きたかったのだろう。八割近く省略された問いに、小さくうなずいた。

後ろから静かに近づき、タオルで首を絞める。抵抗されて引っつかれでもしないように、霧崎が手を押さえつけた。

「うっ……」

若干太めの身体に、力が込められる。が、すぐにその抵抗も消えた。「死んだか」

「ああ」

いつも通りの感覚、いつも通りの殺し。いつも通りの。」「緋月くん」

背筋が、凍りついた。

「緋月くん、だよな？」

聞き覚えのある声。

そうだ、聞き覚えがあつて当然だ。自分は2年以上、この声を隣で聞いてきた。「三原」

副生徒会長、三原綾子。街灯に、その笑顔が浮かび上がる。少しはにかんだ顔は、死んだばかりの死体を前にしていることを考慮すれば、『異常』と言えるだろう。

「見ちゃった」

ふふふ、と笑う三原に、響はかろうじて笑みを作る。笑顔を作らべると、自分に言い聞かせた。笑顔は詐欺師も使う。

その空間だけ、時の流れ方が遅くなつたように思えた。死体を完全に無視して、三原は響に駆け寄る。「ねえ、緋月くん」

「三原、どうしてこんなところに」

「そんなこと、どうだっていい」

足元の死体をチラリと見て、三原は、「この人、誰？」

答えられない。殺したところを見られている。混乱する思考を元に戻そうと努力していると、細い両手が響の頬を挟んだ。

「わかってるよ。緋月くんが、クラッシャーなんだよね」

「三原」

「黙つて。……誰にも言わないから」

夢見るような目つき。うっとりとしたまま、三原は続ける。「この人、緋月くんの知り合いじゃないよね。緋月くんの親戚にも、産

婦人科の女性なんていないもの。……ねえ、緋月くん。私、緋月くんのことなら、何だっけ知ってるの」

グロスを塗ったピンクの唇が、緩やかな弧を描いた。「絶対に誰にも言わないよ。だから……」

「だから？」

三原の目が、射抜くように響を見つめる。響の頬を汗が伝った。

「私だけを見て」

「……え？」

「緋月くん、私ずっと緋月くんのこと見てたよ。私、緋月くんのこと好き。世界中で1番、緋月くんのことを好き」

混乱していた脳が、再び活動を開始する。迅速に三原の言葉、目的を考え、口を開いた。

「つまり、僕に彼氏になれ、って？」

「うん。学校の誰にも言わなくていいから。ただ、私だけのものになっただけ」

頬に当たった両手を引き寄せ、軽く口付けられた。霧崎はすでにいないものとして扱われている。「三原」

「何？」

「僕が彼氏になったら、このことは黙っていてくれるのか？」

「当たり前だよ。……私は、緋月くんが手に入ればいい」

狂ってる。霧崎は瞑目した。

狂気を招いたのが、人類への嫌悪か異常な愛だけかの違い。両極端ともいえるそれは、実際目の当たりにすると壮絶なものがある。

「わかったよ」

「本当？」

「ああ。だから、このことは絶対に言うな」

「もちろん」

そろそろ夜も蒸し暑くなる季節だ。それなのに、抱きしめあつた人を見た霧崎は、背筋に寒気が走るのを確かに感じたのだ。

それぞれの思惑（前書き）

第19話です。よろしくお願いします。

それぞれの思惑

部屋に帰るなり、響はスポーツタオルをベッドに投げつけた。「

……………」

「あんたらしくもないへマだったな」

「うるさい！」

我を忘れた怒声に、一瞬だけひるむ。布団に寝転がる霧崎の横に、響は腰を下ろした。「あの女……！ 肝心なときに邪魔しやがって！」

口調が変わっている。どうやらこの男、思った以上に激情家らしい。細い指が、サラッとした髪をかき上げた。

「緋月」

「ッ！」

投げつけられた一口サイズのチョコレートが、頭に当たる。刺激とも言えないような刺激が、響の頭を冷やしていく。

「頭冷やせ」

淡々と言う霧崎。彼にとっては、警察に捕まることなど何も怖くないのだ。

「……………あぁ」

鈍かった自分の脳細胞が、活動を始める。

思考にかかっていた霞が、ゆっくりと晴れていくように。鮮明になる思考。

「助かったよ、霧崎」

「そりゃよかった」

「考えてみれば、単純なことだ。 三原綾子を、殺そう」

+++

「行ってきましたよ！」
「お疲れさま」

「コヨーテに言われてお使いに行ってきた藍川が見たのは、クレールを作っているモアだった。いつものフリルシャツとロングスカートではなく、縦縞のブラウスと細身のジーンズに、オレンジのドット柄のエプロン。「モアさん、珍しいですね、そんな格好」

「クレールを作ってもらおうと思って。いつものフリルシャツとスカートだったら効率悪いし」

「クリームがたっぷり入った、アレですか」
「うん、アレ」

自分のことを言われているのはかろうじてわかるが、内容がちつともわからないモアは、微妙な表情を見せている。

「昨日、放課後に友だちとクレールを食べたら、気に入っちゃって」「僕も好きですよ。どこで食べたんですか？ 駅前の『キャッツ』」
「？」

「うん。あれ、知ってるの？」
「非番の日によく食べるんですよ。いつか彼女ができれば、デートのときに食べたいなあ……」

幸せそうな藍川にクルリと背を向け、コヨーテはモアの肩に後ろからあごを乗せた。ギリシャ彫刻のような顔がふわりと緩み、もう少し待っててね、とのんきに言う。

「モアさん、モアさん！ 僕の方も焼いてもらっていいですか！？」
「だから、モアは」

「そうでした、すみません！ えーと……、マイ、クレープも、プリーズ！」

「藍川刑事って、本当に高校出たの？」

「出ましたよ！ 大学も出ましたから！」

しかし、実際会話するに当たって、文法などあまり重要ではないのだ。間に格助詞が入っているとはいえ、『クレープ』と『プリーズ』が聞き取れれば、おおよその意味はわかる。「Sure.」

人見知りなモアではあるが、やたら人なつつこい もとい、騒がしい藍川に、だいぶ慣れてきたようだった。ピンクと白の縦縞の紙で包まれたクレープは、ぱつと見だと市販のものに見える。「すごい！ モアさん、これ、本当に売れるんじゃないですか！？」

「Thank you.」

言葉などなくても表情で伝わるくらい、藍川は表情が豊かだ。一応自分たちが追っているのは、大量殺人鬼なのだが、わかっているのだろうか。

「藍川さん」

「はい！」

「頼んだ本は」

「はい、これですね！」

「ありがとうございます」

「こんな本、何に使うんですか？」

「読むけど」

「いや、そりゃそうですね……。あ、高校で好きな人ができたんですか？」

『意中のあの人を虜にする恋愛術』、『女子力アップで手に入れる幸せな恋愛』。恋愛特集の組まれた雑誌など、他にも、いわゆる恋愛の参考書が積み上げられている。

「緋月響に近付いてみる」

「緋月響……って、杏里さんが疑ってる、あの嫌みな生徒会長でしょ！？」

「うん、あの嫌みな生徒会長」

「あんなやつ、一体どこがいいんですか！ ただ顔がよくて頭がいいだけで……」

「藍川さん、けなせてないから」

女子高生の情報網をフルに活用して調べたところによると、響は意外に告白されならしい。というのも、あまりにも完璧すぎて、女子が畏縮してしまうのだとか。彼に告白するのは、よほど自分に自信があるか、ダメもとな人だけ。響の好みを聞いたところでは、かなり普通の希望だったものの、告白した周りは、全員が撃沈していた。

しかし逆を言えば、響は今誰とも付き合っていないということだ。「チャンスといえば、チャンスか……」

恋人になれば、彼を探るために近付くのも、不自然ではなくなる。これは大きな利点であり、同時に捜査の鍵であることを意味する。

しかし問題があるとすれば、自分自身が殺されかねないことだろう。そして同時に、自分は緋月響の恋人になれるかどうかということだ。

「……藍川さん、本を貸してください」

「はいっ！」

とは言え、早い話が緋月響の恋人になるのが最善の策なのだ。だとしたら、取るべき対策は……。

コヨーテは積み上げられた本を、一枚ずつ一枚ずつ、めくっていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7456u/>

完全犯罪

2011年10月3日03時25分発行